

## [音 楽]

## 鑑賞の授業の発展としての創作活動の導入

- マリー・シェーファー作曲「17の俳句」の教材化 -

金子 央\*

## 1 はじめに

教員生活も10年目となった。たびたび実践を論文にまとめてきたが、歌唱や器楽など表現領域ばかりであった。指導要領にある、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てる」という目標を達成するためには、歌唱の活動だけでなく、創作や鑑賞の充実が不可欠であろう。

文部科学省中央教育審議会の教育課程部会では、2007年9月に出した「音楽科、芸術科（音楽）の現状と課題、改善の方向性（検討素案）」の中で、「創作と鑑賞の充実が求められている」とし、改善の方向性として、表現領域を従来の「歌唱」「器楽」に加え、「創作」の三分野とすることを提言した。また、鑑賞領域においては「生徒が、根拠をもって自分なりに批評することのできるような力を育成するようにする」と提言している。そして、「学習全体を通じて、音楽文化の多様性を理解する力の育成を図るとともに、音環境への関心を高めたり」する指導を求めている。

これは、表現領域、特に歌唱分野への指導の偏りに対する警鐘であると思われる。このような声に応えうる授業をしていかななくてはならないと痛感した。

## 2 研究の目的と方法

しかし、問題がいくつかある。

- ・「根拠をもって自分なりに批評する力」をいかにして付けていくか。
- ・楽典的な力がまちまちな生徒に対して、どのように創作の授業を進めていくのか。
- ・「音環境への関心を高める」ことを、限られた時数で指導しなければならないこと。

そこで、鑑賞の授業の中で創作活動を行うことで、これらの諸問題を解決しようと考えた。

鑑賞の授業において、私の課題は、楽曲と生徒の距離感を縮めることである。鑑賞させたい楽曲に親しみ、よく知るようになるきっかけを授業で作っていきたいとつも考えている。そこで、もっと作曲者の心情や意図を生徒が知ろうとすれば、楽曲と生徒の距離感がより狭まるのではないかと考えた。そのためには、創作の「追体験」が最も効果的であろう。そして、実体験をもとに鑑賞すれば、根拠をもって自分なりの批評をする力がつくのではないか。

だが、創作の授業は難しい。国語の読み書きに相当する「楽典」の力が、読み書きに比べて生徒間の力の差がありすぎるからだ。また、音探しや音づくりの活動を充実させるためには、多種多彩の楽器を用意するなど環境整備が大変である。そこで、この問題を、「サウンドスケープ」的に取り上げることで解決しようと考えた。聴こえてきた音を図形楽譜や絵で表して再現しようとする事ならば、どの生徒も取り組むことができるだろう。そして、そのために最適と思われる曲がある。サウンドスケープの提唱者・マリー・シェーファー作曲による「17の俳句」である。この作品のパロディーを作ることによって「情景を音楽にする」行為を追体験させる。俳句は生徒にとって親しみやすく、音環境への関心も高まるだろう。無伴奏混声合唱曲という性格上、楽器演奏やそのための準備も必要ない。

年間指導計画には「音楽と情景Ⅰ・Ⅱ」という単元がある。その中で無理なく実践できれば、限られた時数の中でも、先述の声に応えられる指導が可能ではないだろうか。

創作活動を終えた後で鑑賞の仕方に変化があったかどうか、生徒の変容に注目することで、この研究の成果を探りたい。

---

\* 上越市立城西中学校

### 3 マリー・シェーファー作曲「17の俳句」について

マリー・シェーファーはカナダの作曲家である。また、サウンドスケープという概念を打ち出し、それに基づいた子どもへの音楽教育を提唱している。サウンドスケープとは、ランドスケープ（風景）という言葉をもとに、音風景という意味をもたせた造語である。身近にある物音に耳をすませ、聴こえてきた音を分析したり書き取ったりし、さらには創作までつなげていく。その際にはいわゆる五線紙に書く記譜法とは大きく異なり、絵や図などを用いて記述するなど、ユニークな教育方法により子供の耳を育てていく。マリー・シェーファー自身も図形楽譜による作品を多く残している。「17の俳句」は、日本の合唱団による委嘱で1997年に初演された。松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶などのよく知られた俳人の作品から、委嘱した合唱団の団員の作品まで17句を、夜明けから日没までの1日の情景を表す形で並べて作曲されている。無伴奏混声合唱で、図形楽譜による表現も多く、演奏者の主体性が要求される楽曲である。

### 4 実践の構想

1年生の秋に、「音楽と情景Ⅱ」という単元に取り組む。

時	題 材	主な学習活動
1	赤とんぼ	情景を思い浮かべながら、表現を考え、歌唱する
2, 3	ブルタバ	○ワークシートを用いて情景や演奏効果、歴史的背景などについて学ぶ ○情景を思い浮かべながら鑑賞する
4, 5	発展学習	○「17の俳句」の鑑賞 ○俳句の情景を表現する
6	オーケストラの楽器	それぞれの楽器の特徴や役割について学ぶ

1学期に、「音楽と情景Ⅰ」として、ヴィヴァルディ作曲「春」、シューベルト作曲「魔王」を鑑賞した。生徒はどちらの曲も情景をイメージしながら熱心に聴き入っていた。しかし、ワークシートを見るとどうしても音そのものへの印象批評が多く、作者の意図や気持ちに踏み込んだ内容を発表できる生徒はいなかった。

2学期に入り、音楽祭が行われた。どの学級も1学期の学習を生かして、イメージを膨らませながら表現の工夫を凝らし発表することができた。また、当日の発表、後日行われた実技テストでは、仲間の発表を真剣に受け止めようとする姿が見られた。

これらの学習を受け、「音楽と情景Ⅱ」では、まず「赤とんぼ」に取り組む。生徒が詩の解釈から情景のイメージを広げて歌唱することを狙った。続いて「ブルタバ」を鑑賞した。オーケストラによるそれぞれの場面での楽器の特徴を生かしたリアルな情景表現から作者の祖国への思いを感じ取ることを期待した。

そして、発展学習として「17の俳句」を教材とし、生徒が実際に情景を音にする体験の場を設定した。まず、「17の俳句」を数曲鑑賞し、どんな手法で表現しているかを聴き取る。次に実際にこの曲集の中の俳句を1句取り上げ、実際の演奏を聴かせないでどう表現するかをグループで考え、実際の演奏との違いを比較してみる。その後、授業者が用意した俳句から、生徒は1句選択してオリジナルの作品をグループで創り発表しあう。この活動を通して、生徒が作者の視点に立つことで、楽曲との距離をより狭めて鑑賞することができ、ここで学んだことを今後の表現活動や鑑賞活動に生かすことができるのではないかと考えた。

最後に、オーケストラの楽器について学習し、次の題材である「打楽器アンサンブル」や「雅楽」への学習につなげていく。

### 5 授業の実際

#### (1) 「赤とんぼ」と「ブルタバ」の授業

生徒にとって音楽祭での経験は大きく、「赤とんぼ」では歌詞や楽譜からイメージを膨らませて歌うことができた。また「ブルタバ」では1学期よりも鑑賞の態度がよくなり、興味深く聴き入っていた。しっかり聴き取ろうとする態度や、そこからイメージを広げる力は付いてきたと感じた。しかし、どれも作者の視点に立つところまでアプローチできず、いまだ楽曲と生徒の間に距離感があるように思えた。

#### (2) 「17の俳句」の鑑賞

細かい説明をせずワークシート（資料1）を配り、「この曲はどの俳句の情景を表現しているでしょうか」と発問

し、曲を流した。実際にはBを流したのだが、挙手で確認すると、3つに割れた。生徒は初めて経験する音楽なのだろう、戸惑っている様子が伺えた。同様にあと2曲、クイズ形式で聴いた。3曲も聴けば慣れてくるかと思っただが、最後まで、答えにばらつきが見られた。歌詞を聴き取ろうとするのではなく、情景を聴き取ろうとした結果と思われる。ちなみに他の選択肢にある俳句も「17の俳句」に収められているものである。

(資料1)

音楽と情景Ⅱ ワークシート①

情景を音で表そう！ 俳句を音楽にしたら…?

1組 8番 氏名

○この曲はどの俳句の情景を表現しているでしょうか?

<1曲目>

A 竹の風ひねもすさわぐ春日かな

**B** 稲妻にこぼるる音や竹の露

C 盆踊り太鼓手拍子鳴りやまず

○どんな「音」が聴こえましたか? それはどんな風に表現されていましたか?

聴こえた「音」	表現方法
はやりやへある大きな、低い音と高い音。オクターブはしたり、ハイハイと短く鳴る音。糸はたいよう音。	暗い感じにオクターブ低い音。高いと低い音が、風や音がまきまき感を出していた。

○どんな情景を思い浮かべましたか?

暗くて怖い感じの場所。ゴーンと風が吹いたり、すどろい(いなすま)近くにおりてきたり、遠くからこうして(う)ような情景。
---

<2曲目>

A 光指す岩にくだける水粒花

**B** ほろほろと山吹ちるか滝の音

C 音もなし松の梢の遠花火

(3) 実際に創作する

実際に鑑賞したあとで、この曲はカナダ人が作曲したものであり、演奏もカナダ人によるものだと説明する。生徒からは驚きの声が上がった。「カナダ人がこれだけ俳句の情景を表現できるのだから、君たちもできるよね」と言ってワークシート(資料2)を配布した。

生徒は班に分かれ、意見を交わしながら、ワークシート(資料3)を用いて構想を練った。実際に演奏して発表しあいたかったが、生徒たちが苦戦していたようなので、どんな構想をしたかのみを発表させた。その後、実際にマリー・シェーファーが作曲したものを流した。生徒たちは違和感をもちながらも、「それもありがた」「そうきたか」というような感想を書いてきた。

例えば、ある班では、「稲妻ってことは雨が降っているよね」「きっと風が強いんじゃないかな」と、イメージを大きく広げていった。マリー・シェーファーは「からり」「さらり」の対比に主眼を置いているので、「解釈の違い」がここで出たことになる。そしてそれはそれでよいと認めた。「これでもいいんだ」「これでよかったんだ」と生徒が感じ、次の創作への意欲につながったと思う。

○どんな「音」が聴こえましたか?

聴こえた「音」	表現方法
高い音から低い音へりんしょうする「ミステリー」という言葉を思い浮かべた音。あふりとかわれた音。低くてのび音。	上から下へとたたらた流れのよう。な、高い音から低い音へりんしょうしてあふり明ぶる音とたてていた。

○どんな情景を思い浮かべましたか?

山のどこか景色がはきりしな戸所で、いなつきが、最初たたらた水が流れている情景。
---

<3曲目>

**A** 涼しさや鐘をはなるる鐘の聲

B 涼風の曲りくねって来たりけり

C 鐘の声水鳥の声夜はくらき

○どんな「音」が聴こえましたか?

聴こえた「音」	表現方法
すどろいた明ぶる音。ホワッとした低い音。かね〜かね〜かね〜という低い音。	低めのホワッという音で「かね」なっている音を出していた。高い音で、暗い中にさわやかさを出していた。

○どんな情景を思い浮かべましたか?

うすやらの朝、すすしけ空の中、大きな寺のかねがゴ〜ゴ〜となっていた情景。
--------------------------------------

(資料2)

音楽と情景Ⅱ ワークシート②

情景を音で表そう！ 俳句を音楽にしたら…？②

1組 8番 氏名

○今日聴いた3曲を参考に、自分たちでも音楽を創ってみよう！

<お題>

石川はからり稲妻さらりかな

○必要な「音」を考えよう！ そしてその表現方法を考えよう！

必要な音	表現方法
からからにさみしい低い音。 風がふいてくる音。 稲妻の音(はげしい音)	からりと乾いた感じの音がさかさまに音を出す ちと高い音が風の音を出す。 稲妻のはげしい音を出す。

<注意！>

- ・俳句を「歌詞」として使ってください。
- ・出す音は「声」と体だけを使ってください。
- ・構成は自由ですが、「はじめ」「なか」「おわり」を意識して、1つの音楽になるようにしてください。

(資料3)

○表現プランを考えよう！

	表現する音	表現方法
はじめ	石川の はげしい木の流 れる音。ゆたたり	ゴォー(声) 石川からり(声) 低い声 静かに
なか	風がふいてきて あらしの前兆。	フュー(声) → ドキ → 風の音 あらし(声) あらし(声) 独唱入れた
おわり	(はげしい) ( )なすま。	

○実際にこの俳句につけられた音楽を聴いてみて、分かったこと・気づいたこと・思ったことを書こう。

俳句のふんいきがレガリ音であらわされていて、  
でもその中にちびと言葉が混ざって、なびんていつ  
ちびと1つの俳句の音楽になっていてすこぶたです。  
自分たちで考えた時はすこぶ癒して音楽の色がうま想像  
できなかったけど、本物はうまおしておどろいたし、  
レガリたてんておどろきました。

(4) オリジナル作品を創作する

鑑賞したり、実際に創作したり「17の俳句」をとりあえず体験したあと、オリジナル作品の創作に入った。俳句は、できるだけ音をイメージしやすいものと思い、有名無名なものを含めた10句から選択させた。

1. 古池や蛙飛び込む水の音
2. 柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺
3. 五月雨をあつめてはやし最上川
4. 荒海や佐渡に横とう天の川
5. 閉かさや岩にしみ入る蟬の声
6. 雀の子そこのけそこのけお馬が通る
7. 髪ゆれて心もゆれた冬の風
8. ピストルがプールの硬き面にひびき
9. 春の海終日のたりのたりかな
10. 夏嵐机上の白紙飛び尽す

1, 2, 3を選んだ班が多かった。他には、4, 8, 10が選ばれたが、5, 7, 9は選ばれなかった。班に分かれて、俳句を選択し、「必要な音」と「その表現方法」をまず考え、「はじめ」「なか」「おわり」を構想した。その後、ワークシート(資料4)をもとに、実際に音にしてみる。班で話し合いながら、試行錯誤して音づくりをしていた。

最後に発表会をもった。聴いている人は目を閉じ、聴き終わったあとでワークシート(資料5)に何の俳句に音を付けたか予想させた。

(資料4)

題名: 古池や蛙飛び込む音

命題内容	表現方法
<ul style="list-style-type: none"> <li>古池の音</li> <li>かえるのとびこんだ音</li> <li>木の波が伝はる音</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 音で表現して、音の大きさや速さを表現</li> <li>→ 音の長さやリズム</li> <li>→ 音の質</li> </ul>

◎表現プランを考えよう!

表現する音	表現方法
はじめ 古池の音	<ul style="list-style-type: none"> <li>女: 入る音と飛び込む音</li> <li>男: 音の長さやリズム</li> </ul>
なか かえるのとびこんだ音	<ul style="list-style-type: none"> <li>みんな: 音の大きさや速さを表現</li> </ul>
おわり 木の波が伝はる音	<ul style="list-style-type: none"> <li>男: 音の長さやリズム</li> <li>女: 音の質</li> </ul>

(資料5)

音楽と情景II ワークシート④

情景を音で表そう! 俳句を音楽にしたら...?④

1組 8番 氏名

◎各班の発表を聴いて感想をまとめよう

班	選んだ俳句	感想
1	五月雨をあつめてはゆ 最上川	口ぶきの音の音と、小さくたたききながら、音の手ははやく音がおもしろくて、1つにまとまるとよかったです。
2	秋夕べは鐘がなるを 荒海	かきこえた鐘の音がきこえたら、いのがおもしろいとおもしろかったです。
3	古池や蛙飛び込む木の音	1人1人の音がしかりして、ストーリーになって、おもしろいとおもしろかったです。
4	55	
5	五月雨をあつめてはゆ 最上川	ちゃんと音の中に「最上川」という言葉が入っていて、想像できました。
6	荒海や佐渡に横たえる川	男声の音が言葉の工夫があって、女声もいろいろ音が違って、おもしろかったです。

◎活動全体を通しての感想を書こう

前回より考えやすかったけど、「本当にこの音で表せるかな?」といろいろ試行錯誤して大変でした。でも、みんなで協力してできて、なかなか1つの物になったような気がするので良かったです。3班や6班の発表がとってもおもしろいと思ったし、それに聞いている人が「おもしろい」と思えるものを作っていてすごいと思いました。

(5) 授業を終えて

生徒は初めての創作の授業で、この2時間は終始戸惑いの表情を見せていた。しかし、活動を終えて書いた感想を読むと、「大変だったけどおもしろかった」「難しかったけど楽しかった」「またやりたい」という内容が多かった。創作活動が新鮮であったこと、俳句という素材がとっつきやすく長さも妥当だったこと音づくりや音探しそのものが生徒にとって楽しく感じられたことなどが考えられる。

〈生徒の感想から〉

- ・前回より考えやすかったけど、「本当にこの音で表せるかな?」といろいろ試行錯誤して大変でした。でも、みんなで協力してできて、なかなか1つの物になったような気がするので良かったです。3班や6班の発表がとってもおもしろいと思ったし、それに聞いている人が「おもしろい」と思えるものを作っていてすごいと思いました。
- ・どの俳句もうまく表現されていて良かったです。今回は言葉をあまり入れなかった。けど伝わった。
- ・全部の音が工夫されていて良かったです。けっこう音を作ったり考えたりするのが難しかったです。あわせてごちゃごちゃになったときがあった。音を作るのは大変だけど完成したときはけっこううれしかったです。班みんなで協力して作れて、楽しかった。どの班もいろんな音を考えていて、すごかった。

多くの生徒が創作活動に戸惑い、苦しみながらも前向きに取り組み、作者の視点に立って情景を音にしたり、他の演奏を聴いたりする経験ができたことは大変有意義であったと考える。

演奏時間は20秒～30秒程度の班が多く、やはり「なか」の部分を実感させることが難しかったようだ。逆に、俳句からドラマを想像したり展開を工夫したりして「なか」の部分を実感させた班は1分近い作品を創ることができた。「17の俳句」も1分30秒～3分程度の作品が多い。せめて1分程度の作品を創ることができれば、生徒はもっ

る力を発揮できたと捉えることができるのではないか。

ただ、創作のレベルが果たして中学生として適切かどうか不安になった。この創作の授業は鑑賞の授業の発展学習と捉えてはいるが、よりよい指導をするためにはやはり評価基準が必要であり、その面の配慮に欠けていた。

#### (6) 授業の修正点

よりよい創作体験にするために、授業においての課題が数多く残ったので修正する必要性を感じた。

##### ① 発表会形式より録音形式の方がよかった。

当初の予定では録音をするつもりだったが、環境整備などの点でうまくいかなかった。録音の方が、生徒も思いっきり表現したり、フィードバックすることもできるし、鑑賞する際も生徒が感じた世界観をしっかり聴かせる方がよかった。

##### ② 明らかに違う詩の解釈が出てしまった。

「古池や」を表現するのに、「ヘドロ」を描写しようとするなど、明らかにおかしい解釈があったのだが、創作意欲を失わせたくないと思い自由にさせてしまった。俳句をしっかり味合わせる時間が必要だと思った。国語科で、俳句の鑑賞文を書く活動があるので、それとリンクする方法が考えられる。

##### ③ 「歌詞」としての表現ができなかった。

嵐の音を表すために足を踏み鳴らしたり、風を表現するために口笛を吹いたりする工夫は多く見られたが、歌詞を使った表現は少なかった。全て歌詞で表現させる方がより多彩な表現ができたものと思われる。

これらの修正点を改善することで、創作活動がより楽しく、そして感動できるものに近づけると思う。

## 5 課題

音楽祭で生徒が感動することができたのは、演奏に感動することができたからである。詩や楽譜から読み取れる作者からのメッセージに共感して創り上げた合唱は歌う側にも聴く側にも大きな感動が残った。そう考えると今までの自分の鑑賞の授業で、感動を共有したかどうか振り返ってみると、ほとんどなかったと思われる。そしてそれが、楽曲との距離感をなかなか狭めることができなかった原因であることに気付いた。

創作活動を行うことにより、音楽祭の時ほどまでにはいかないが、生徒は楽曲を創り上げた喜びや伝えたり伝わったりした時の楽しさを味わうことができた。この行為に感動することができる経験、その感動を共有する経験は、きっと今後の鑑賞活動、さらには表現活動を豊かにすると思われる。

しかし、肝心の、授業をしたその後であるが、「自分なりの批評ができるようになった」ことがわかる活動を仕組むことができず、現時点ではこの授業が効果的だったかどうかは分からない。それが分かるような活動と組み合わせる工夫が必要であった。今後は、積極的に創作活動を取り入れつつ、その活動が他の領域や分野にもよい影響が及ぶよう、指導計画や授業を工夫していきたい。

創作や鑑賞においても、感動を共有できる授業をすることが、これから求められる音楽指導であり、この実践をきっかけにそのような授業を多く実践していきたい。

### 〈引用文献〉

中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会（第4期第9回）資料4-1  
文部科学省 中学校学習指導要領 第2章 第5節

### 〈参考文献〉

R. マリー・シェーファー, 今田匡彦「音探しの本」春秋社, 1996年  
R. マリー・シェーファー, 鳥越けい子, 若尾 裕, 今田匡彦「サウンド エデュケーション」春秋社, 1992年  
R. マリー・シェーファー, 高橋悠治「教室の犀」全音楽譜出版, 1980年